

令和8年2月

大学院文学研究科

吉澤 徹 提出・学位申請論文（課程博士）

『縄文中期環状集落における建築更新の研究』

審査報告書

國學院大學

吉澤 徹 提出・学位申請論文（課程博士）

『縄文中期環状集落における建築更新の研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

縄文時代中期の東日本地域では、竪穴建物や墓坑、貯蔵穴などの施設・構築物が同心円状にめぐる環状集落が発達し、中期中葉から後葉にかけてその最盛期を迎えた。とりわけ関東・甲信地方では、この時期の大規模集落跡の多くがこうした環状集落であり、集落の造営期間が長期にわたり数百年から 1000 年に及ぶ例も少なくない。本論文の著者・吉澤徹氏は、こうした歴史的事象の社会的・歴史的意義に注目し、長期にわたる人びとの居住活動の累積が、どのような過程を経て「環」という特徴的な形態となるのかという問いを立て、環状集落の形成過程に着目した分析を行った。

論者は、環状集落の造営にあたって、新たに竪穴建物を建築する際に過去の構築物やその遺構が何らかの重要な意味をもち、それが建築行為を連鎖的に継起させる要因になっていたのではないかと予測する。そして長期に及ぶ居住痕跡が結果的に環状となる過程を明らかにするために、既存の建築物と新たに構築される建築物の連鎖的な関係を捉えることの必要性を主張する。こうした考えに基づき、一連の連鎖的な建築と改変行為の中にパターンを捉える分析法として、「建築更新」と称する新たな分析概念を考案し、環状集落の事例分析を行っている。

本論文は全 9 章から成り、大きく、1) 序論：研究史と課題整理、問

題設定、建築更新研究の理論的予察、2) 方法論と事例：建物更新に着目する研究法の構築と事例分析、3) 環状集落の分析：環状集落跡における建物更新パターンの研究、4) 結論：建築更新と形成過程からみた環状集落の評価、からなる構成となっている。

第1章「環状集落研究の現状と課題整理」では環状集落に関する研究史を詳述して論点を整理し、本論全体の中軸となる問題設定を行う。第2章「建築更新研究の理論と方法」では「建築更新」の考え方と研究の基礎となる理論と方法に関する予察を行っている。

第3章から第5章は具体的な研究法の構築とそれを適用した分析に充てられ、環状集落における竪穴建物の更新にさまざまな規則的パターンが存在することを明らかにしている。

第3章「竪穴建物の分類と変遷」では、関東地方南西部の18遺跡1759棟、中期前半の勝坂1式期から後期初頭の称名寺I式期にわたる竪穴建物跡を資料として、建築更新の分析の基礎となる竪穴建物の形態分類を、セリエーショングラフを用いた定量的な手法を用いて行っている。竪穴建物跡の形態の系譜的な分類単位を「系統」と呼び、勝坂式期前半期から加曽利E3式期までに認められる7a類・6a類・5d類・5b類の「旧系統」と、加曽利E式期に現れる6b類と5e類の「新系統」とに分類した。

第4章「竪穴建物形態と更新規則」では、神奈川県大熊仲町遺跡を分析対象として、竪穴建物の系統ごとに更新パターンを分析する。竪穴建物の建築・改変の流れに新旧二つの系統があることを確認するとともに、

そのそれぞれに支柱穴配置形態の段階的かつ不可逆的な更新過程があることを捉え、次のような重要な事実を明らかにしている。1) 新旧両系統は時間的に併存する期間を有するにもかかわらず、旧系統の7a・6a・5d・5b類から新系統6b・5e類に更新された竪穴は認められない。2) 新系統6b・5e類から旧系統7a・6a・5d・5b類に更新された事例も認められない。3) 支柱穴配置形態の更新は、新・旧の各系統内で完結している。4) 旧系統の竪穴建物7a・6a・5d・5b間の更新は(4本柱→)5d→6a→7aという不可逆的な更新を経る。5) 新系統の6b類・5e類の竪穴建物は、いずれも4本柱から更新される場合が多い。これらの事実から、竪穴建物の更新には規則的なパターンがあり、竪穴の反復が単に省力化のための凹地の再利用などではないことを論じている。

第5章「出入口埋甕の更新と取り扱い」では、竪穴建物の出入口部に付帯する埋甕とその更新について、神奈川県山王平遺跡の竪穴建物跡を対象に分析した。出入口埋甕を新たに追加して埋設する場合は、既存の出入口埋甕よりも外側に埋設するパターンがあることを見出し、これを「前方追埋設パターン」と呼称した。この更新パターンは、竪穴建物の「系統」が異なっても共通して認められると指摘する。

以上の基礎的検討を踏まえて、第6章から第8章では、環状集落という空間構成のなかで竪穴更新に関わる諸現象を検討し、環状集落の空間規則と竪穴の更新規則の関係を明らかにするための分析を進めている。

第6章「環状集落における竪穴構築の場の規則性」では、東京都多摩ニュータウンNo.72・795・796遺跡における環状集落跡を対象とし、竪

穴建物を構築する場の選択性の分析に取り組んだ。一般に環状集落跡には、新旧の竪穴建物が重複した痕跡が顕著に見られるが、これには「既存の竪穴を再利用して竪穴建物を構築するケース」（反復）と、「既存の竪穴跡に重複して新たに竪穴を掘り直すケース」（重複）の2通りがある。論者は、環状集落跡の空間構成のなかで「反復」や「重複」がどのように行われたのかを分析することにより、竪穴や竪穴建物の構築の場の選択性を捉えることができると考え、そうした視点から新たな竪穴と古い竪穴の位置関係や同一竪穴の利用回数などを分析した。そして、竪穴の再利用が多く重複が少ない斜面上方のパターンと、竪穴の再利用が少なく重複が多い斜面下方のパターンが、時期を越えて踏襲されていることを明らかにしている。また、近接する小規模な環状集落跡である多摩ニュータウンNo. 446-B 遺跡の形成過程にも近似したパターンがみられることに注目し、No. 72・795・796 遺跡を形成した建築更新の規則が、No. 446-B 遺跡の集落形成にも大きな影響を与えたと推量している。

第7章「環状集落における5e類の更新パターン」では、多摩ニュータウンNo. 72・795・796 遺跡における5本柱の竪穴建物5e類を例に、1度でも5e類の竪穴建物が構築されたことが明らかな竪穴（加曽利E2式期の11基・加曽利E3式期の3基）を抽出してその更新過程を検討した。その結果、加曽利E2式期の7基で4本柱→5e類という更新パターンが捉えられ、4本柱の竪穴建物は更新の初期形態としての性格をもち、5e類の竪穴建物は更新の最終形態的な性格が強いと考察している。また、加曽利E2式期の5e類は中央広場をはさんで対向する位置に構築

されており、特定の場に立地する4本柱の竪穴建物が5e類に更新されていたとも指摘する。こうした分析を通して、集落内の場所ごとに建物更新の規則があり、それが環状集落跡の「環」の形成に関与していたと考察している。

第8章「同軸同範建築にみる環状集落跡構造」では、主軸方向・支柱穴配置・竪穴プラン・炉の位置関係が完全に一致する竪穴建物跡を「同軸同範建築」と呼んで概念化し、これを新たな手がかりとして多摩ニュータウンNo.72・795・796遺跡の環状集落跡の構造を分析した。同軸同範建築に該当する2棟1組の4ペア計8棟を抽出し、竪穴内から出土した土器に大きな時期差がない点を確認するとともに、当該の2棟単位がいずれも東西二大群の同一群内に立地することを明らかにしている。この事実から、同軸同範の竪穴建物の建築ないし上屋の移設先が、原則的に東西二大群の群別内に限定されていたことを論じている。

本論の結論となる第9章「竪穴の更新と縄文中期環状集落の性格」では、以上の分析から明らかとなった事実を総合し、竪穴建物の更新パターンという切り口からみても環状集落の形成過程が規則性をもつことが再確認できると強調する。そして結論的な考察として、環状集落が成り行きの結果ではなく、何らかの文化的規則に基づいて形成されたものであるとの見通しを述べて本論の結びとする。

論文審査の結果の要旨

縄文時代の東日本地域に「環状集落」と呼ばれる集落形態が特徴的に

みられることは、すでに周知の考古学的事実であり、その最盛期が中期にあることもすでに明らかとなっている。環状集落については長い研究史があり、社会的・文化的背景についてこれまでさまざまな議論が交わされてきたが、その歴史的評価は大きく分かれており、縄文時代の考古学における主要な争点の一つとなっている。本論文は、「建築更新」という新規性のある分析視点から、環状集落の成り立ちとその形成過程に潜む規則性を明らかにしようとする挑戦的な研究である。

現在、環状集落跡の研究では、一時期（ワンモーメント）の景観を明らかにして、一見大規模に映る環状集落の実在性を疑問視する主張が根強い。環状集落跡は長期間の累積的な痕跡に過ぎず、一時期に共存していた竪穴建物は少数であることから、「環状集落跡」はあれども「環状集落」は実在しなかった、という極端な意見である。環状集落の虚構性を強調するこうした「横切りの集落論」は、環状集落の構造分析から縄文社会の構造を捉えることはできないという過小評価にもつながっており、またそれに対する批判論も提起されている現状である。

こうしたやや膠着した研究状況に対して、論者は「建築更新」という新視点から新たな議論を提起する。一時期に建っていた竪穴建物だけから環状集落の成り立ちを考えるのではなく、既存の建物跡も重要な構成要素だったのではないかという発想の転換によって、新たな環状集落研究の方向性を模索するのである。累積的な集落景観の形成過程を分析する方法は、これまでの縄文集落研究では十分に深められていなかったものであり、その具体的な研究法を構築しようとした点に本論の新規性が

ある。既存の構築物やその痕跡と新たな構築物との連鎖的な関係に注目し、建築行為や建築物の配置がそれ以前の建築物やその痕跡と何らかの関係にあり、連鎖的な関連性をもつことを、具体的な事例分析に基づいて論じている。そして、連鎖的に継起していく建築・改変の行為を、集落の形成過程から読み取ることを通じて、環状集落の成り立ちを解明しようと試みるのである。こうした点に、これまでになく新鮮な研究展望が認められる。

建築更新という新視点に立って環状集落の成り立ちを解明するには、有効な方法論の構築が必要となるが、論者は新たな研究戦略に適した分析手法を自ら考案し、事例研究の中で実践している。なかでも、主軸方向・支柱穴配置・竪穴プラン・炉の位置関係が完全に一致する竪穴建物跡の存在を見出し、「同軸同範建築」として概念化したことは、これまでに知られていなかった重要な手がかりを掴んだもので、その出現パターンを環状集落跡の規則的な構造と関連付けて明らかにした点が重要である。中期の竪穴住居型式を対象とした既往の研究はあったが、遺構更新と住居型式との関係性という視点はこれまでになく、遺構更新の不可逆性や同軸性が存在することを指摘した点は高く評価される。

遺構研究は再検証が困難な点に大きな制約があるが、著者は図面上での再検証を可能とする基礎データを悉皆的に提示しており、十分な裏付けを伴った主張となっている。分析の基礎となる竪穴建物跡の図版はすべて自分自身で再トレースして作成するなど、真摯な研究姿勢も評価に値する。惜しむらくは、著者自身が発掘調査に関わった資料がなく、二

次資料（他者の調査所見・図面）のみを論拠とする点に制約がある。著者が目指す研究は、高い問題意識と技術水準に基づく精度の高い調査記録が前提となることから、竪穴建物跡や柱穴の調査法に関する問題提起や具体的な調査法・着眼点について提言があってもよかった。発掘調査報告書の記録だけからの検討には限界があり、今後は論者自身が発掘調査によってそれを解明していくことを期待したい。

本研究の問題関心の核心は環状集落の歴史的 성격の解明にあるが、論者はそこに性急に踏み込もうとせず、堅実な議論の前提となる確かな根拠の把握を目指して新たな基礎研究を開始したといえる。そして、環状集落の形成過程に規則的なパターンが見出せるかどうかを本論の最大の目的に位置づけ、具体的な事例分析から検証を行っている。検証可能な問題を設定し、新たな研究法と事例分析から、中期環状集落にみられる建築更新について、いくつかの重要な事実と規則的なパターンの存在を明らかにした。膠着していた環状集落の研究に新たな展望を示した点で意義深い研究であり、総評として高く評価できる。

ただしその半面には残された課題も多い。竪穴建物の型式や系統を詳細に分類し、それらの建築更新にさまざまな規則性が存在することを明らかにしたものの、分節構造などの環状集落の構造分析には進もうとせず、今後の研究展望を描き切れていない点が惜しまれる。環状集落跡には竪穴建物だけでなく、墓群、貯蔵穴群、掘立柱建物、廃棄帯などのさまざまな遺構が伴うのが通例だが、竪穴建物の分析に終始して一面的な議論に陥らないかとの懸念もある。今後はさまざまな構築物に目を配り、

それらと竪穴建物の関係を踏まえて、広い視野から集落構造論を展開する必要がある。またその際には、大規模な環状集落跡の性格を、地域の遺跡群とセトルメントシステムの中に位置づけて考えるマクロな視点も必要である。

分析手法と資料操作に関する課題も指摘される。本論の分析対象は神奈川県大熊仲町遺跡や東京都多摩ニュータウンNo.72・795・796遺跡など少数の事例に限られており、本論に示されたパターンがどれほどの普遍性と広域的広がりをもつ現象であるのかが現状では明らかでない。また、関東地方南西部の竪穴建物形態を定量的な手法で大別的に分類し、各形態が不可逆的に更新されていく事実を捉えている点は重要だが、建築更新のパターンを析出することに視点が偏り、「建て替え」や「反復」など居住の連続・不連続の判断は示されていない。依拠する土器型式編年を含め、集落の形成過程を捉える時間的解析の精度を高めていく必要がある。

建築更新パターンの解釈についても、さらなる考察が必要である。住居形態・型式の研究は、内部構造や上屋構造の検討とあわせて進めなければ、単なる図形的な理解に陥るおそれがある。縄文尺の存在など建築部材にモジュールがあった可能性も議論されており、遺構として残る柱穴よりもむしろ失われた上屋の構造にこそ規則性や継続性があったという視点を合わせもつ必要がある。柱径の復元など、建築学的側面からの検討も課題である。

環状集落の歴史は縄文時代前期から晩期にまたがり、その歴史的性格

を論じるには通史的な視点が欠かせない。本論は中期の環状集落に絞った研究となっているが、環状集落の歴史からなぜ中期の事象だけを切り取るのか不鮮明である。通史的視点をもたなければ、中期環状集落の発達の社会的背景や中期末に出来た環状集落の衰退・断絶などの歴史的事象の意味を明らかにすることはできないであろう。中期環状集落に関して、いくつかの重要な新事実と規則的なパターンの存在を明らかにしたものの、つまるところ現象面の解析結果に留まり、環状集落の歴史的性質に関して明確な見解と展望を示し得ていないところに課題が残る。今後さらなる研究の深化に期待したい。

こうした点に課題が指摘されるものの、「建築更新」という、集落造営の当事者たちの意識や行為に関わる新たな発想と視点から、これまでにない議論を立ち上げた点には、環状集落研究の新領域の開拓につながる新規性・発展性が認められ、その学術的意義は高く評価できる。よって本論文の提出者である吉澤徹氏は、博士（歴史学）の学位を授与される資格があるものと認められる。

令和8年2月17日

主査	國學院大學 准教授	谷口 康浩 ㊞
副査	國學院大學 教授	青木 敬 ㊞
副査	帝京大学 准教授	櫛原 功一 ㊞
副査	千葉大学 教授 國學院大學大学院 兼任講師	阿部 昭典 ㊞